

よそおうくらす

ロータス便り

ISSUE #4

HOUSE OF LOTUS

1 | アグラ



2 | アーメダバード



3 | デリー



4 | コルカタ



5 | カシ米尔



6 | チェンナイ



8 | ジャイプール



7 | パラナシ



- 1 はじめてのインドは30年以上前。
22年の月日をかけ造られた美しい霊廟「タージマハル」を母と共に観光。
- 2 精巧なレリーフが美しい「アダーラジの階段井戸」は、まるで地下宮殿のよう。
- 3 買い付けの際にいつも訪れるオールドデリーの問屋街、ベンガル州の小さな村のジャムダニ織り工房で職人と。
- 4 20代にモデルの仕事で訪れた、カシ米尔地方の水の都・スリナガル。このダル湖では、ボートハウスと呼ばれる水上ホテルに泊まりました。
- 6 マハーバリプラムの世界遺産、「クリシュナのバターボール」。押しても引いてもピクともしない不思議な巨大岩です。
- 7 沐浴する人々、川原の火葬場…。ヒンドゥー教の生と死を実感した、聖なる「ガンジス川」。
- 8 別名「ピンクシティ」と呼ばれるジャイプールは、大好きな街。「アンベール城の鏡の間」にて。

旅する

ハウスオブロータス

インド編

学生時代にインドの伝統手工芸品に魅了され、その後、数えきれないほど訪印し、たくさんの方の街を巡りましたが、まだまだ、見たいもの、行ってみたいところがいっぱいです！



コーデュロイワンピース ¥36,000、ストール ¥90,000、ウォーム天竺チュリダール ¥12,000
(すべてハウス オブ ロータス) そのほか本人私物

混沌、喧噪、そして熱風——。

20歳で初めてインドを旅したときの胸の高まりを今も忘れることはありません。神秘的でエネルギー溢れる街で出会った、それまで見たことのない輝きを放つ雑貨や布に目を奪われたのを覚えています。

以来、尽きることのない憧憬の国。ハウス オブ ロータスの2018年秋冬は「インドの手仕事からつながる世界」をテーマにお届けします。

カディ、カンタ、ミラーワーク……インドの伝統的な手仕事であるテキスタイルは、ハウス オブ ロータスのファッションの原点ともいえるもの。今回、手仕事のルーツを辿って訪ねた小さな村では、緑の木々と鳥の鳴き声に包まれた工房で、職人さんたちが、ただひたすらに手を動かして美しい布を織っていました。

幾度となくインドと日本でやりとりを重ねて、熟練の職人さんたちと一緒に手がけた服が、これから順次ショップに並びます。上質な素材感とディテールは、ハウス オブ ロータスが大切にしているエッセンス。お気に召していただけたら幸いです。

ハウス オブ ロータス
クリエイティブディレクター
桐島かれん





右：ウールリンクスブルオーバー ¥28,000、
ベイズリーカシミアストール ¥32,000、ミラー
ワークバッグ ¥8,300

左：ウールリンクスカーディガン ¥38,000、
カッチミラーワークワンピース ¥48,000、コー
デュロイイージーパンツ ¥18,000、タッセル
付パプーシュ ¥13,000 (すべてハウス オブ
ロータス) そのほか本人私物





右：ジャムダニワンピース ¥64,000、ウールミラーワークパンツ ¥28,000、タッセル付パプーシュ ¥13,000
左：シルクビーディングワンピース ¥68,000、蓋付きアタごバッグ ¥9,000 (すべてハウス オブ ロータス)、
ピアス ¥18,000 (マユミ ムラサワ)、シューズ ¥4,300 (パンダアメリカ) そのほか本人私物





カディコットン

手で紡いだ木綿の糸を手織りした布。インド独立運動の際にガンジーが「自分たちで糸を紡いで織った布の服を着る」ことを伝え歩き、「カディ」はインドの人々にとって大切なシンボルになっています。機械織りとは異なり、ところどころに糸のムラがある、ふわっと空気を含んだ風合いが魅力。柔らかくシワになりにくいので、旅先にもおすすめです。

長い年月をかけ、手機(てばた)で一枚一枚製織しています。

伝統的なチャルカー(糸車)を回し、糸を紡いでいます。

カディコットンカシユールドレス ¥76,000 (ハウス オブ ロータス)



Aari Embroidery

アリ刺繍

目がそろった精緻なチェーンステッチは、インド北部カシミアル地方に伝わる「アリ刺繍」と呼ばれるもの。技術が発達した現代では、熟練の職人が一枚ずつ生地に手で描いた図案を下絵に、ハンドミシンで刺繍を施していくことが可能に。ハウス オブ ロータスでもボリューム感のあるワンピースやチュニックの裾にハンドミシンでエレガントなアクセントを。

(参考商品)



刺繍枠に入れ、押さえの付いていないミシンを踏み、生地を動かしながら絵を描くように、丁寧に刺繍を施していきます。

愛する
ハウス
オブ
ロータス
が

インドの 手仕事

インドの国土は想像以上に広大で、地域によって気候や風土が異なり、その土地ごとに得意とするさまざまな手仕事が息づいています。とりわけ、織り、染め、刺繍など布にまつわる伝統技術は驚くほどの豊かさです。

デリーなど都市の市場に行けば、各地から集まった多くの品々を見ることができますが、ハウス オブ ロータスが大切にしているのは、インドの手仕事のルーツ。地方の小さな町や村の職人たちが、家庭や集落で過ごす日々の暮らしの中で、織ったり、染めたり、刺繍をしたりしてつくられたテキスタイルの素晴らしさをお伝えできたらと思っています。

インドの伝統技術は多種多様。その中からハウス オブ ロータスのアイテムに取り入れられている手仕事を紹介します。



Khadi Cotton

Dori Work

ドリーワーク

「ドリー」とは紐のこと。生地にふんわりした紐を留めながら立体的な模様をつくり、アクセントとしてビーズなどで華やかに装飾します。ハウス オブ ロータスの「ドリーワーク」のドレスやブラウスには「ミラーワーク」や「カットワーク」も施され、インドの手仕事を贅沢にまもっていただけます。

ドリーワークドレス ¥46,000 (ハウス オブ ロータス)



カットワーク

コットン地を切り絵のように切り抜いたカットワークを、もう一枚の布に縫いつけたアップリケ刺繍。大きな布は一枚を4人の女性によって四隅から刺繍していくことも多いようで、女性たちがおしゃべりをしながら作業をしている楽しい風景を想像するだけで、幸せな気持ちになります。

(参考商品)



重ねた生地を細かく手刺繍していきます。インドの女性は、家事の合間に手仕事をする人も多いそう。

Cut Work

Jamdani

ジャムダニ織

17世紀のムガル帝国時代から伝わる、インド東部ベンガル州の織物技法。細い糸を手機で織る過程で、別の糸を通した針を使って、織り布を縫い取りながら模様が描かれ、透けるほど繊細な生地は伝統衣装のサリーに仕立てられます。コルカタ郊外の高い技術をもつ職人の工房で織られた生地は、ため息がでるほどの美しさです。

ジャムダニカシュクールブラウス (参考商品)

サリーの柄に設計図はなく、職人の感性で模様が描かれていきます。



Mirror Work



日が出ている時間に女性たちが集まり、小さな鏡の周りを刺繍糸でかがり布にとめていく細やかな作業。

ミラーワーク刺繍

衣装に小さな鏡の薄片を縫い付けるミラーワーク刺繍は、インド西部のグジャラート州を代表する手仕事のひとつ。鏡に反射する光が砂漠の中で輝く目印や魔除けになるなど、由来にはさまざまな説があります。ハウス オブ ロータスのアイテムを手がけるカッチ地方の工房のように、職人が鏡をひとつひとつ手で割るところは今や稀少な存在です。

カッチミラーワークブラウス ¥38,000 (ハウス オブ ロータス)



Ralli Quilt

ラリーキルト

重ね合わせた布に刺し子刺繍が施されたもので、インドでは「カンタ」とも呼ばれています。オールドサリーなどの古布を重ね、直線のハンドステッチで生地を丈夫にする実用的な技法ですが、布の色合わせが華やかで、ファッションやインテリアのアイテムに昇華。ストールやベッドカバー、ラグなどが人気です。

カンタストール ¥25,000 (ハウス オブ ロータス)



カンタは女性の“家事力”を嫁ぎ先に伝える手段としても使われていたそうです。

Pompon

ポンポン

丸くてかわいい「ポンポン」の装飾は、インドの職人の手仕事によってつくられるもの。さまざまな大きさや色があり、ファッションアイテムだけでなく、タペストリーやクッションなどにも使用されます。ハウス オブ ロータスではストールやアンダーパンツの裾のほか、さりげないアクセントとしてドレスの背中の上部に付けることも。

ポンポンパンツ
¥18,000 (ハウス オブ ロータス)



Brock Print



ブロックプリント

図案を彫った版木に一色ずつ染料をつけて、スタンプのように生地を押していく、手作業の染色技術。細かい柄でもほぼズレがなく押し、温度や湿度によっても染料や押す力を調整するのは熟練の技です。一色ごとに洗って天日干しして色を定着させるため、天候に左右されます。機械では出せない、かすれやにじみ、経年変化も手仕事ならではの贅沢です。

ロータスプリントピンクタックワンピース
(参考商品)

工房で職人さんたちがボンボンと判を押していく様子は、なんともリズムカル。線や色が大きくズレたりしないように押していくのは、熟練がなせる技なのです。



Gotta Patti

ゴタパティ

「ゴタ」=金属糸、「パティ」=細工品。インド北西部のラジャスタン州では古くから伝わる金属糸を使った技法を「ゴタパティ」と呼びます。金色や銀色のリボンの縁を縫い付けて図柄が表現されるのが一般的。花嫁衣装やお祭りの衣装などに取り入れられることも多いですが、モダンなブラウスやワンピースに施しても素敵です。

ゴタパティブラウス ¥62,000 (ハウスオブロータス)

ラクナウ刺繍

インド北部のウッタルプラデーシュ州にあるラクナウという町で400年前から受け継がれてきた美しい手刺繍。現地では「上質な布で刺繍された」という意味をもつ「チカン」とも称されます。イスラム文化の影響を受けた幾何学模様や草花の模様が特徴で、生地と同系色の糸で刺繍するのが主流。繊細な模様と立体感は、中国の刺繍・汕頭を彷彿させます。

(参考商品)

花や鳥など身近なモチーフを多く用い、刺し子刺繍で表現していきます。



Lucknow Embroidery

花蓮紀行

India

春の訪れを祝う 世界一カラフルな祭り 「ホーリー祭」



世界中からお祭り好きな人たちが集まり、音楽やダンスと共に大盛り上がり。



先日のインド出張のとき、ジャイプール滞在中にちょうど重なったのがヒンドゥー教の春祭りであるホーリー祭。もともと豊作祈願や悪魔払いの意味を込めてはじめられたようですが、その日、出会った人には、見知らぬ人でもだれにでも色の粉や色水をかけ合い、春の訪れを祝うお祭りです。インド暦第11月（太陽暦では3月頃）の満月の日から2日間行われることが一般的のよう。

お祭りの存在を知りつつも、ちよつと怖いし、顔も服も色がついてドロドロになるので、近づくことはやめようと思っていたのです。でも、お祭りの日は仕事にならないのでホテルで待機するしかなく、それも退屈……と思っていると、なんと、一緒に行動していた現地コオーディネーターの方が、汚れてもいい白い服を用意してくださり、勇気をもってみんなで街に出ることにしたのでした。

さすがは観光地であるジャイプール。街の中心には、ホーリー祭を目当てに訪れた観光客が世界中からたくさん集まっています。赤、青、緑、黄色、ピンクなどの色粉を売る屋台が立ち並び、すでに色粉を掛け合っていた人々の熱狂に驚いていたのもつかの間、近くに人が来たと考えたやいなや、

「ハッピーホーリー！」という声とともに、あつという間に顔にピンクの色粉を塗られました。ここでス イッチオン！ こちらも負けじと「ハッピーホーリー！」と応戦します。通りすがりの人でもおかまいなし。みんなでキヤーキヤー笑いながら、色まみれになっていきます。

この日は身分も民族も階級も関係

なく、分け隔てなく一緒になって国中が熱に浮かされるカオスなお祭り。こんなに子どものようにテンションが高くなって遊んだのは久しぶりです。色だらけになりながらも、インド人も外国人も周りにもみんなが笑っているのを見て、なんともいえない幸福感に満たされたのでした。



たまたまですが、私の横顔がインドの地図のように見えます。



全身カラフルになる祭りなので、汚れてもいい服で行くのはもちろん、全身白のクルタを着ている人が多かったです。



色粉を塗りあつた後は、「ハッピーホーリー」と言いながら抱き合います。